鳴門教育大学研究紀要
第22巻　2007

カール・ライネッケ作曲「ピアノ協奏曲第4番　ロ短調　作品254」についての一考察

村　澤　由利子

（キーワード：カール・ライネッケ，ピアノ協奏曲，ゲヴァントハウス）

はじめに

カール・ライネッケ（Carl Heinrich Carsten Reinecke 1824－1910）は，ドイツのピアニスト，作曲家で指揮者であり，その当時は音楽家として有名な存在であった。現在では，彼の作曲は多数あるがピアノ作品はあまり演奏されない。2005年12月，ドイツ，シュトゥットガルト市において，ライネッケ作曲の「ピアノ協奏曲第4番　作品254」を演奏し研究したが，その際，楽譜を始め様々な資料を日本国内において手にいれることが困難であった。

また，練習過程において感じたことは，作風や音楽感がこれまでの作曲家とは異なっており，1曲の中に様々な作曲家のニュアンスが見て取れた。日本国内では，ほとんどと言ってよいほど彼の資料が無く，ドイツにおいても少なかったが，シュトゥットガルト市でライネッケが書いた彼自身の自叙伝を手に入れることができた。自叙伝の中に当時の音楽家達，ショパン，シューマン，リスト，ブラームス等との交友をはじめ，当時の時代背景等が詳しく書かれており大変興味深かった。

今回はドイツにおいても演奏されることが珍しい，ライネッケの「ピアノ協奏曲第4番」を中心に，彼の生涯における演奏や当時のピアニスト達との交流，及び彼の作風や音楽感について研究し考察した。

ライネッケの生涯

ライネッケ（Carl H. C. Reinecke）は，1824年6月23日にハンブルク城壁外のエルベ川沿いの都市アルトナに生まれた。彼の父（Johann P. Rudolf Reinecke 1795－1883）は音楽教師で当時，音楽理論家として有名であった。父から音楽教育を受けたライネッケは子供の頃よりピアノに才能を見せ,同時にヴァイオリンやビオラも,彼の父のオーケストラの最後尾で演奏をしていた。子供の頃から努力して演奏に参加したことで，ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770－1827）や，モーツァルト（Wolfgang A. Mozart 1756－1791）の交響曲や序曲，メンデルスゾーン（Freix B. Mendelssohn 1809－1847）の「真夏の夜の夢」などを知り，彼の音楽の知識を広げた。この頃8歳で序曲を作曲している。

11歳で本格的な音楽教育を受け始め，特別にヴァイオリンを習いにアルトナから隣町のセントパウリの町を通ってハンブルクに通った。ギターや声楽なども父の弟子に教わった。この頃には彼は祝祭日にアルトナやセントパウリの市民劇場でダンス音楽演奏のアルバイトをしている。お客のリクエストに応えて様々な曲を演奏し，楽しんで仕事をした。1837年12月4日には13歳でヴァイオリニストとしてDuo–concertを行うまでになっている。

アルトナの合唱団では常にピアノを担当し，ヘンデル（Georg F. Haendel 1685－1759）の「メサイア」，ハイドン（Joseph Haydn 1732－1809）の「天地創造」ベートーヴェンの「ハ短調ミサ曲」などが演奏されていた。16歳でアルトナの音楽ホール（Tonhalle）での演奏会では，合唱団とオーケストラの前に立ち自作の曲を指揮した。この時の記憶は彼にとっていつまでも鮮明であった。

ライネッケの父は教育者としての才能があり，彼の通奏低音理論，ウェーバー（Jacob G. Weber 1779－1839）の作曲芸術論，マルクス（Adolf B. Marx 1795－1866）の2巻の作曲理論などを用いて教育し，ライネッケは13歳で正規のフーガを作曲できた。ピアノはミューラー（August E. Mueller 1767－1817）の教則本を基礎として，フンメル（Johann N. Hummel 1778－1837）の教則本3巻を学んだ。ディアベリ（Anton Diabelli 1781－1858）やクーラウ（Friedlich Kuhlau 1782－1832）の小品，特にハイドン，モーツァルト，ベートーヴェン，バッハを弾き，当然

ながら，フンメル，モシェレス（Ignaz Moscheles 1794－1870），デュセック（Johan L. Dussek 1760－1812），リース（Ferdinand Ries 1784－1838），フィールド（John Field 1810－1837）など勉強し，最後にメンデルスゾーン，ショパン（Frederic Chopin 1810－1849），リスト（Franz Liszt 1811－1886）などを弾くことができるまでになった。

14歳の時に北ドイツ音楽祭がハンザ同盟都市ブレーメン，ハンブルク，リューベックの結合促進のために開催された。この時父親の２度目の演奏旅行に同伴し，ハンブルクでの演奏会でオーケストラ最後尾に，自分と同じ年格好のヴァイオリニストを発見し，彼が後にヴァイオリンで有名なケーニヒスロウ（Otto F. von Koenigslow 1824－1898）であった。その時から彼は生涯の友となった。

1837年にハンブルクの出版社から Op. 1 として「ピアノのための２つの作品と左手のためのフーガ」を最初に出版した。そのとき13歳でライプツィヒの音楽新聞に好評を掲載された。1840年には歌曲の作品に18マルクの賞金が与えられた。このようにライネッケの音楽教育はずっと父のもとで行われ，ピアニスト，作曲家として活躍することとなった。

その後1861年３月14日にライプツィヒ・ゲバントハウスで楽長として最初のピアノコンチェルトを演奏し，その後，音楽院院長も兼ねて35年間の在職中作曲家，教師，学校管理者としてもその能力を発揮し，ドイツ音楽界では有名な存在となった。
1910年３月10日ライプツィヒで86歳の生涯を閉じた

ライネッケの演奏旅行

1843年にデンマークの首都コペンハーゲンにおいて，ピアニストとして数々の演奏を行い，たびたび王宮や王宮劇場の国王の前での演奏を行っている。

1843年～1846年にはアルトナに帰り，ライプツィヒに演奏旅行を行った。今回はヴァイオリニストとして弦楽四重奏団で，後に有名になるシューマンの弦楽四重奏曲を演奏した。シューマンの作品を多く取り上げていたので「Neue Zeitschrift fuer Musik」に讃辞とともにメンデルスゾーンの「ピアノ協奏曲ト長調」およびシューマンの「ピアノ五重奏曲」の演奏が紹介された。メンデルスゾーンを訪問して，作品35の「プレリュードとフーガ」を演奏して褒められ，ライネッケ自身の作曲した作品２の曲は，かわいらしいと言われたが，再度の訪問時に見せたその他の曲についての批評はあまり良いものではなかった。この間，ライプツィヒやワイマールで，たびたび演奏活動を行っている。

1846年にはブレーメン，ダンツィヒ，リガへ演奏旅行を行った。ブレーメンでは招待コンサートとして，ヴァイオリニストのケニヒスロウとチェリストのグラバウ（Andreas Grabau 1808－1884）とともにベートーヴェンの「ピアノ三重協奏曲」を，ピアノ独奏はメンデルスゾーンの「無言歌」，ショパンの「ポロネーズ」，その他シューマンの「ピアノ五重奏曲」などを演奏した。そして，後のイギリス国王ジョージ５世となるハノーファー公に招待され，御前でベートーヴェンの「クロイツェルソナタ」，メンデルスゾーンやショパンのピアノ作品を演奏した。

1846年～49年はデンマークの首都コペンハーゲンで国王クリスチャン８世より奨学金を受け，宮廷ピアニストとして国王に仕えることになった。国王の夏の避暑地に呼ばれたライネッケは，前任者のクールレンダー（Bernhard Courlaender 1815－1898）の後を受けて，イタリアオペラの好きな国王にピアノでオペラの曲を演奏することになった。このことはハンブルクの新聞にも讃辞とともに掲載された。国王のための演奏の合間をぬって，アルトナやゼークベルク，キールさらにコペンハーゲンでもバッハの「３台のピアノのための協奏曲」やシューマンの「ピアノ五重奏」を演奏している。宮廷ではイタリア音楽が好まれ，国王の好みであるイタリアオペラでは特にヴェルディの「ナブッコ」，「エルナニ」などが指名された。ベリーニやドニゼッティのオペラも同様であった。しかし彼は，私的な室内楽演奏会では友人とともにドイツの音楽を好んで演奏していた。
コペンハーゲンの冬は寒さが厳しく，彼は，家の前の歩道で滑って倒れたときに左手を打ち，ひどい痛みで医者には骨折の心配もあると注意されたため，王宮の演奏会ではピアノを弾くのを止めて，ヴァイオリンを演奏することにした。しかし痛みで不十分な練習しかできず，彼の言葉で「自分の生涯の最初で最後の不出来な仕事をした」そうで

ある。しかしその演奏は良い批評をうけた。1848年１月20日に国王が死去し，後を次いだフリードリッヒ７世は音楽には興味を持たなかったため，ライネッケはライプツィヒに帰ることになった。

1848年～49年には再びライプツィヒで演奏活動を行い，1848年７月にはシューマンの滞在するドレスデンのザックスホテル（Hotel de Saxe）を訪れたライネッケは，シューマンよりハ長調の交響曲を献呈された。この曲をハレとゼゲブルクのコンサートで指揮をした，ゲヴァントハウスの指揮者リーツ（Julius Rietz 1812－1877）から手紙を受け取り，この縁で再びライプツィヒに滞在することとなった。９月のゲヴァントハウスコンサートでは自身の新作品とシューマン，ショパン，メンデルスゾーンの曲を演奏した。この後演奏旅行でワイマールに行くときにリストと出会い，ゲヴァントハウスの室内楽コンサートにリストを招いた。そこでのリストの演奏から，言葉では十分に説明できないほどの感動を受けた。しかしこの時のリストへの報酬は僅かであったのでリストはライプチッヒに失望し，このコンサートが最後となった。

ライネッケは室内楽の演奏旅行のためにブレーメンに行き，ブレーメンに良い印象を受けたため，1849年の末に住居をブレーメンに移した。ここで作曲家として幸運にもピアノ曲「バラードOp.20」を書き上げ金貨７枚（68マルク）を得た。17歳で「真夏の夜の夢」序曲を作曲したメンデルスゾーンの様な幸運ではなかったが，このバラードは出版から52年後の1902年までに知る限りで公式に５回の演奏がなされている。ブレーメンでも多くのピアノ演奏やオーケストラの指揮を行い，1850年の12月にシューマン夫妻がブレーメンを来訪した際には，ライネッケとクララがシューマンの「２台のピアノのための変奏曲」の演奏を行った。この時の記念の賞状はずっとライネッケの仕事部屋に掛かっている。またリストを招待して演奏会を開催して，劇場やオーケストラに大きな出費があったにもかかわらず，大きな興行収入を得て経営の手腕も発揮した。

２つのコンサートで大きな収入を得たので，リストの勧めもあり，1851年に，一躍パリへと演奏旅行を行った。すでに1848年にリストはパリの新聞に「ライプツィヒの指揮者にして作曲家ライネッケ」を紹介していた。パリのベルリン通りに住居を見つけて，リストの紹介状とともにベルリオーズ（Louis H. Berlioz 1803－1869）を訪問した。３月25日のサン－セシルホール（Halle Saint–Cecile）で，ベルリオーズが作曲した交響曲「ロメオとジュリエット」などを聴いての感想を，「ベルリオーズの曲は心に訴えるものが無く，ベートーヴェンやシューマンの作品のような精神性が見られない。一時的な印象のみで何か別の芸術だ」と父親に書き送った。ライネッケはベルリオーズの音楽に理解を示さなかった。しかしライネッケはリストの家でリストの２人の娘のブランディーネ（Blandine List 1835－1862）とコジマ（Cosima List 1837－1930,後のハンス・フォン・ビューロー夫人，さらに後のワーグナー夫人）にピアノのレッスンをした。そこには若くして死んだリストの息子ダニエル（Daniel List 1839－1859）も同席していた。

パリではサロンでの演奏会が主な活動であり，作曲も進んでいない。しかしパリ音楽院コンサートでヒラー（Ferdinand Hiller 1811－1885）との出会いによって，ケルンの音楽院教授への道が開かれた。ケルンおよびバルメンで音楽教師としてまた作曲家として活動を行い，1859年にはブレスラウ大学の指揮者および音楽主任に就任した。

1860年からゲヴァントハウス楽長リーツ（Julius Rietz 1812－1877）の後任としてライネッケは指揮者および楽長に就任する。これから35年間の長きにわたり彼のライプツィヒでの活躍が始まり，後に音楽院院長も努めて，当時の彼の名声は広まった。1861年３月14日にゲヴァントハウス楽長兼ピアノソリストとして，初めての演奏会にモーツァルトの「ピアノ協奏曲　戴冠式」を演奏し，カデンツァは彼が作曲した。この後，彼はモーツァルトの演奏の権威者となり，モーツァルトのピアノ協奏曲全てにカデンツァを書くことになる。

ライネッケの音楽家との交友関係

彼の自叙伝から幾つかの挿話を通じて音楽家との交友を見た。

・メンデルスゾーンとはライネッケが19歳の時コペンハーゲンからヴァイオリニストのニルス・ガーデ（Niels·W·Gade 1817－1890）と共にライプツィヒを訪問したときに尋ねて行き，メンデルスゾーンの「プレリュードとフーガ

作品35」を演奏披露して褒められた。さらに他の自作の曲を聴いてもらい，2回目の訪問では多くの自作の曲を弾き，そのときは厳しい批評を受けることになった。しかしゲヴァントハウスでの演奏を勧められ，メンデルスゾーンのオーケストラ練習を見聞して，彼の，テンポに厳しく練習での曲のテンポの厳密な仕上げを知って，生涯を通じて彼を尊敬することになる。ライネッケとゲヴァントハウスとの関わりは，ここでメンデルスゾーンを介して強くなったといえる。

・ロベルト・シューマン（Robert Schumann 1810－1856）はライプツィヒ音楽院の教授であったが，短期間でドレスデンに移住した。彼の学院でのレッスンは，本来無口な彼がさらに寡黙となり，生徒の演奏に何も評を言わずに終わることが多く，時に口から出る言葉は「クララの演奏を一度聴くべきだね」といったものであったと，後の学院長ライネッケは批評している。しかしクララ・ヴィークの頃からその天才的演奏を聞いていたライネッケは，結婚後のクララ・シューマンとロベルト・シューマンとは親しくつきあっていたので，多くの挿話が見られる。中でもシューマンのピアノ五重奏曲（近年，著者も演奏会で弾いた）を家で演奏したとき，クララが譜めくりをした。曲が終わってから，クララが怒った口調で「ちょっと教えて，ロベルト，私が弾くときは静かに落ち着いてと言っていたのに，ライネッケが速く弾くのはどうして」と言ったのに対して，シューマンが「ああ，分かったんだね，クララ。男性が速く弾くのと女性が弾くのとは，すこし別の事なんだよ」と彼女をなだめ，涙を止めたとのことである。

このことから，当時の一流ピアニストとしてのクララ・シューマンは速い演奏が常識的で，ライネッケもまたそのように演奏したが，シューマンはゆっくりと演奏することを指示していたことが判る。当時の演奏者は技術を披露するために速いテンポで演奏し，シューマンは作曲家の指示するテンポを守るべきとした演奏法の解釈問題がここに見て取れる。ライネッケは作曲家としてよりも，演奏者としての立場にあったといえる。

・ブラームス（Johannes Brahms 1833－1897）は27歳の時にライプツィヒを訪れており，この時に彼自身の管楽セレナーデをゲヴァントハウスで演奏するためだった。この曲の練習でオーケストラの第一クラリネット奏者が息継ぎなしでは演奏できないと苦言を呈し，ゲヴァントハウスの楽長であるライネッケはパート譜に手を加えて，事なく練習を終えた。ブラームスはこのことを後で知って怒り，ライネッケとの間は気まずくなった。ライネッケはブラームスがヴァイオリンなどの弦楽器とは異なる木管楽器の特性を充分に知らないために生じたことと考えていたので，この後42年間（ライネッケの生存中）ブラームスのこの曲が聴かれることは無かったと言っている。もちろん，この曲がその後，ゲヴァントハウスのプログラムに載ることはなかった。ブラームスのハンガリア舞曲にも言及してあり，これらは四手によるピアノ曲を原曲としており，ハンガリーの作曲家イグナツ・フランク等の作曲であり，ブラームスのオリジナルとはいえないと批判的であった。ブラームスもライネッケとその作品には生涯好感を持たず，厳しい批評をしていた。

・ワーグナー（Richard Wagner 1813－1883）はライプツィヒでタンホイザー序曲とマイスタージンガー前奏曲が演奏される際に，ゲヴァントハウスを訪問しており，楽長としてライネッケも関わった。ライネッケが楽長として挨拶した時，ワーグナーの応対が非常にもったいぶったもので，ライネッケは良くない印象を持った。マイスタージンガーの予行練習ではワーグナーの練習指揮に驚いた。それは，ワーグナーは当時の常識的な指揮法とは異なり，激しく身体を動かし足を踏みならし，古い指揮台に嵐のように埃が舞い上がった。それを見て，ライネッケはモーツァルトも指揮したと思われる，その由緒ある古い指揮台の心配をしている。後にワーグナーの出版した「指揮法について」の中に，この時のライネッケの指揮によるゲヴァントハウスオーケストラの演奏について，ワーグナーが聴衆から不満が出たのは指揮者であるライネッケが曲を意図的に歪曲させたと感じ，自分の前奏曲が指揮者（ライネッケ）に合ってなかったと言及している。このため，以後のマイスタージンガー前奏曲の演奏は，ゲヴァントハウスでは上演されなかった。今日では指揮法はワーグナーの述べたようなスタイルが主流となり，ライネッケの指揮法は古い形として考えられている。ライネッケの在任中，1884年に手狭になったゲヴァントハウスが建て替えられた後，新しい作曲家の曲を取り上げていったが，ワーグナーの作品はわずか3回しか演奏されていない。

・フランツ・リスト（Franz Liszt 1811－1886）との出会いは個人的なものでは無かった。ハンブルグのコンサートでピアノの巨匠であるリストに会ったのは，子供のころであった。しかし彼の父はライネッケが将来クララ・ヴィークや，さらにリストのようになることを望んでいたので，このときの強い印象を述べている。4～500人が入る満員になったホテルのホールで演奏するリストは彼にとっては最初のピアノの巨匠だった。フンメル（Johann N. Hummel

1778－1837）の「ピアノ七重奏曲」，モシェレス（Ignaz Moscheles 1794－1870）の「クロマティックエチュード」，ベートーヴェンのピアノソナタ「月光」，シューベルトの「セレナーデ」を演奏した。ライネッケはこのとき受けた強い印象を60年たってもはっきりと心に描けるほどのものであった。

ライネッケの楽譜について

ライネッケのピアノ協奏曲は４曲ある。今回は2005年12月６日（火曜日）20：00～　ドイツの Weisser Saal–Neues Schloss Stuttgart（シュトゥットガルト市新宮殿　白のホール）で演奏した第四番　ロ短調 op. 254を取り上げる。ライネッケはショパンやシューマンより14年後に生まれ，86歳と長命であった。ブラームスもライネッケのピアノ協奏曲を参考にして自分のピアノ協奏曲を作曲したと言われている。

シュトゥットガルト市よりコンサートの招待が届き，ライネッケのピアノ協奏曲第四番を指定された時，この曲についてよく知らなかった。即，楽譜を探したが，国内には全くなく，海外よりのレンタル楽譜のみしか存在しなかった。と言うことは，日本国内では演奏されたことが無いのであろうか。

調べた結果，ドイツ Jul.　Heinr.　Zimmermann 社にあると言うことで，発注し，一ヶ月後に100年前の1901年に印刷された茶色くなった楽譜が送られてきた。期間は一ヶ月間研究用で借用ということである。

これまでの他のピアノ協奏曲の楽譜は，ピアノ二台のために編曲してあり，一台はピアノ独奏用，二台目はオーケストラの部分をピアノで弾くように編曲してある。これは練習用であり，オーケストラが無くてもピアノ伴奏で弾けるようにするためである。しかし，今回取り寄せた楽譜は全くピアノ独奏の部分しか書いて無く，オーケストラの部分をピアノ伴奏で弾いて貰うことは出来なかった。これまでの楽譜で，このタイプのものは初めて目にした。

また，シュトゥットガルトの指揮者である Alexander　Scherf 氏よりオーケストラのスコアのコピーが送られてきたが，これは手書きのものであった。

1901年制の楽譜には多分，何人かのピアニストが弾いたであろう書き込みが鉛筆で為されており，これから勉強する上で大変参考となった。指使い等も，楽譜に記されてあるものとは別に指番号が書かれており，各楽章とも何ヶ所もあり，100年くらい前のものであっても，現在著者が使う指使いと同じであり，参考になり，また興味深かった。

アーティキュレーションに関しても，多数書き込んであり，アクセントの位置，強弱等についても，若干，楽譜に指示してあるのとは違い，その当時の演奏家の感じたであろう点で，気がついたことを以下に述べてみる。

・ p をより pp にする
・ 早めに ff から p へディミニュエンドする弾き方
・ Tutti. から Solo へ入る際に少しルバートするよう指示等。
・ f を消して p に直してあること

等，楽譜を見ているだけで，この100年前の楽譜を使ったピアニストの演奏が浮かんできた。

ここでライネッケのピアノ協奏曲について述べる。

第一番　嬰ヘ短調　fis–moll Op. 72（1879）
第二番　ホ短調　　e–moll Op. 120（1873）
第三番　ハ長調　　C–dur Op. 144（1878）
第四番　ロ短調　　h–moll Op. 254（1900）

と４曲作曲されており，それ以外に Op. 33の作品もあると書かれているものもあった。

それぞれ明晰で，メンデルスゾーン風の名人芸的所法で作曲されており，ピアノが全体を通して常時引き続けているという作風である。メロディーは生き生きとしており，管弦楽法も卓越している。

また，ライネッケのピアノ演奏法は，独特のピアノのタッチを用い，両腕を動かさずに指を丸くして弾いたといわれている。彼は古典的な演奏スタイルを固く信じていた。速いパッセージが多く出てくるピアノ協奏曲の作風にもそ

れが感じられる。

彼のピアノ独奏曲も多いが，作風はシューマンに似ている。しかし，ブラームスの作風も感じられる。

小品では初心者のためのピアノ練習曲やソナチネなどの，美しいメロディーのものが多く作曲されている。彼は，Haus　musik「家庭音楽」の大家で，当時流行した比較的単純な形式による音楽が得意であった。室内楽曲には特に優れたものが多く，「ウンディーネ」と題されたフルート・ソナタは「ピアノとフルートのためのソナタ」と記されているように，ピアノは決してフルートの単なる伴奏ではなく，両者が対等の立場になって，協奏的に扱われている。彼の創作力の最も充実していた1880年頃の作品であると言われている。これもピアノの部分はシューマンの影響を受けており，ドイツロマン派の流れを汲んでいる。

曲の構成と分析

第１楽章　Allegro　♩＝152　2／2　h-moll　ロ短調

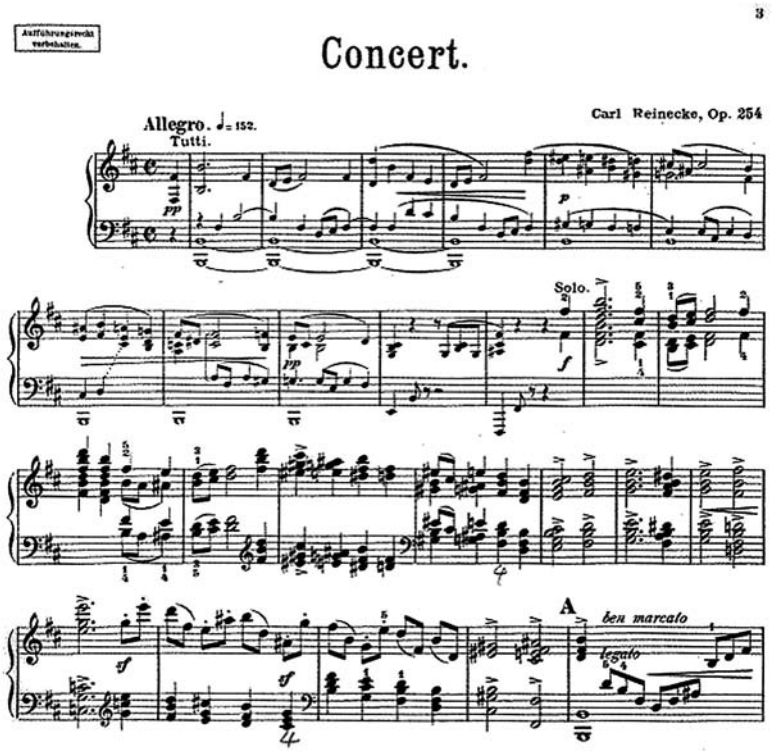
オーケストラは pp で11小節の Tutti.（注）を奏し，p になり，そして pp となる。そこへピアノが f で前奏のオーケストラのテーマと同じテーマを和音で12小節奏で，やがて速い動きとなる。（譜例１）

この Tutti.はショパンのピアノ協奏曲に比べて短いが，ピアノの出だしはブラームスの響きを感じ取れる。特にこの楽章は他の二つの楽章よりも演奏してみるとブラームスの音を感じた。

次にやはりオーケストラが主題を奏すると，その上に載ってピアノが速いパッセージを奏し，このピアノの動きの音形は，メンデルスゾーン風であると感じた。

（注　Tutti.：全員で。全部の楽器による総奏）

譜例１



次にピアノで第二テーマの甘いメロディがユニゾンで奏され，オーケストラに受け継がれる。相変わらず，ピアノは休む暇無く速いパッセージで動く。（譜例２）

譜例２



14小節の Tutti. のあと，展開部は８分音符の３連符で動き，オーケストラとピアノが相互にメロディを掛け合い，impetuoso（激しく）と指示通り，大変ダイナミックな音楽が盛り上がる。（譜例３）

譜例３



やがて H–dur に転調して，前半に出てきた甘いメロディの第二テーマが ff で奏される。（譜例４）h–moll に戻ると，集結部コーダとなり，オーケストラが壮大な第三テーマを奏し，ピアノが左手のオクターブのメロディに乗って右手が速いパッセージを奏する。最後は animato となり，ダイナミックに終わる。（譜例５）

譜例 4



譜例 5



第 1 楽章全体は少し重い重厚な音楽で，ブラームスの流れが感じ取れた。

第２楽章　Adagio ma non troppo　♩.＝69　９／８拍子　Es-dur　変ホ長調

前奏はTutti.が５小節，弦がロマンティックな美しいメロディのテーマを奏で，クラリネットに受け継がれたあと弦と管のメロディに乗ってピアノが分散和音で始まり，やがてピアノソロで美しいロマンティシズムの溢れたテーマが12小節にわたり奏される。この部分は少しブラームスのピアノの動きに似た部分が感じられた。（譜例６，７，８）

譜例６



譜例７



譜例８



その後，ピアノがオーケストラの流れるメロディの上に載って両手で f で力強くダイナミックな動きを見せる。（譜例 9 ）

譜例 9



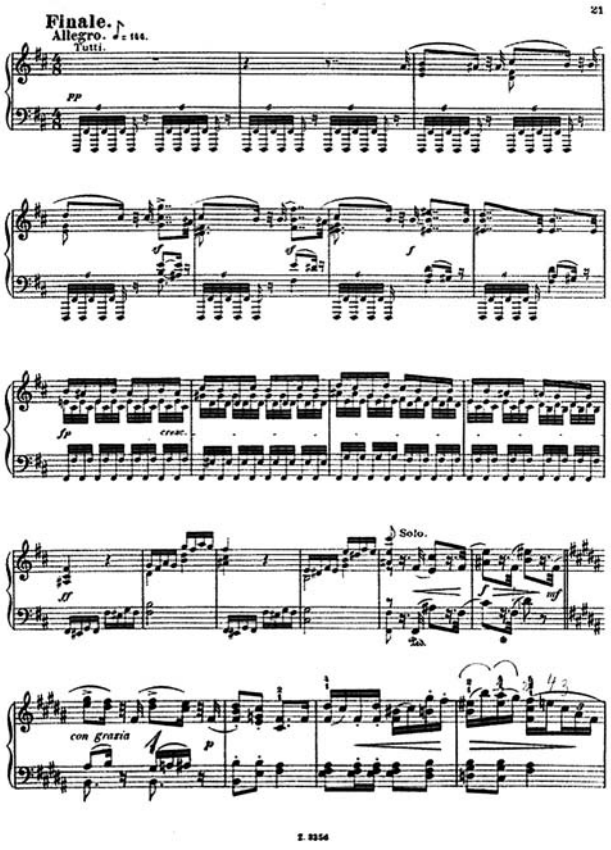
中間部に大変叙情的な旋律を歌いながら，最後にはピアノソロで流れるようなテーマをうたってオーケストラと共に静かに終わる。

第３楽章　Finale Allegro　♪＝144　4／8拍子　h-moll→H-dur　ロ短調→ロ長調

前奏は15小節の Tutti.が h–moll で始まる。チェロが32分音符で刻み，フルートと第１ヴァイオリンが導入のメロディを奏し，ピアノソロへと受け渡す。h–moll から H–dur に転調し，明るく軽快な主題がピアノで華やかに繰り広げられる。(譜例10) 終楽章のピアノの動きはメンデルスゾーンの音楽と大変よく似ている。この楽章全体を通して，速いパッセージが続き，ほとんど休み無くピアノが奏している。

昼間部で左手の流れるようなパッセージに乗って右手に優雅なメロディーが出てくる。(譜例11) この部分はショパンともシューマンとも違った音楽であり，彼の個性が感じられる。またこの楽章はどちらかというと Rondo 形式に似ており，ピアノの出だしのテーマが調を変えて何度も出てくる。ショパンのように同じメロディでも調を変え，音形も全部違っているために練習の際に音形をつかむのに苦労した。

譜例10



譜例11



この第３楽章のテーマはとても憶えやすく，一度聞くと大変印象に残るものである。

コーダに入る前に，ピアノのカデンツァが17小節間出てくる。これはメンデルスゾーンに似ていて，指の動きがとても弾きにくかった。（譜例12）

コーダ（終結部）は，この楽章の中間部に出てきた優雅なメロディがオーケストラで奏され，ピアノはそれに乗って速いパッセージで動き，ショパンやラフマニノフのピアノ協奏曲の最後の部分と同じように似ており，壮大な感じを出して終わる。

譜例12



ピアノ協奏曲第四番についての考察のまとめ

この曲は日本国内で楽譜が全く手に入らず，ドイツでのみ，それもレンタル楽譜で100年以上前に印刷された物であったことである。これは，国内では今まで演奏されていなかったと言えよう。このたび，この曲をドイツ，シュトゥットガルトにおいてオーケストラと協演し，全くこれまで演奏したことのないライネッケのピアノ協奏曲を弾くことが出来たのは，またとない機会であった。この曲について日本で知り合いにいろいろ尋ねたが，誰一人知っている者はいなかった。ベルリン・フィルハーモニーのコンサートマスターであるシュター・プラバー氏にも聞いたが，ライネッケの管楽器の協奏曲は知っているが，ピアノ協奏曲は全く知らないとのことであった。これほど珍しい曲である。

まず，手元に楽譜が届いたときには，1901年の印刷の古いものであり，このような作曲家の生きている時代の古い楽譜を目にすることは今まで無く，研究用として借用したため，（もちろん楽譜を傷つけてはいけないという注意書きが付いていた）大変練習に気を遣った。そしてその楽譜の中に様々な書き込みがあったこと。これは当時の著名なピアニストが書き込んだと思われるが，それが今回のシュトゥットガルトでの演奏会に大変役に立ったことが大事なポイントの一つであった。指使いの書き込みも，現在の著者の弾き方と同じように書かれており，アーティキュレーションも参考になった。これまで色々と調べた中でライネッケ自身が腕を動かさずに指を丸くして引くという古典的なスタイルを取っていたために，このピアノ協奏曲の音形や両手の動きが，作風の中に見て取れた。

ブラームスがライネッケのピアノ協奏曲を参考にして彼のピアノ協奏曲を作曲したと言われるだけあって，練習しているとこの曲の第一楽章の出だしの部分や，和声的な響きにブラームスの音楽が，そこかしこに感じられた。

第二楽章は，大変叙情的なメロディがうたわれ，全くロマン派そのものであると感じた。グリーク（Edvard H. Grieg 1843－1907）のイ短調のピアノ協奏曲の第二楽章の音楽と似た部分を弾きながら感じた。

第三楽章 Finale は，全体的にメンデルスゾーンの音形とよく似ている。なかでも中間部の右手の優雅なメロディはライネッケ独自の個性が感じられた。

以上通して弾いてみると，テクニックは大変難しい曲であるが，やはりショパンやシューマン，ブラームスのようにそれぞれが持っている独自の作風の個性が，見られないような感じを受けた。ドイツ国内では著名であるかも知れないが，少なくとも日本では楽譜が手に入らないなど，ピアニストには演奏されていない理由があるように思われた。特に，一緒に協演した Junges Kammerorchestor Stuttgart は，いつもあまり演奏されない新しい曲を取り上げて演奏することをモットーとしているオーケストラなので，ライネッケをプログラムに取り上げたようである。今回，このような機会でもない限り，私にとってライネッケは生涯無縁であったに違いない。

そして，今まで知り得なかった新しい作曲家について研究できたことは，私にとって今後の大きな糧となるに違いない。

おわりに

ライネッケはゲヴァントハウスの指揮者兼楽長として35年間在職し，当時としては著名な存在であった。彼はモーツァルトの音楽の権威者として知られたが，今日の視点から見ると，新しく現れたブラームスやワーグナーとはその作曲や演奏のスタイルが異なり，いわゆる古い形となっていた。従って彼の作曲したピアノ協奏曲も，あまり演奏されなくなったのも理解できる。さらに，ライネッケの作風にはシューマンやメンデルスゾーンの強い影響が見られるのは，彼の交友関係から理解できた。

ライネッケはピアニストとしても一流であったために，彼のピアノ協奏曲は技功的に大変難しいものであった。また，両腕を動かさずに，指を丸めて弾く彼独特の古典的スタイルの演奏法を固く信じていたため，それが彼の作風に影響していると感じられた。自叙伝にあるシューマン夫妻やリスト一家との交友に関する叙述からは，当時の音楽事情が垣間見えて興味深く，また作風に強い影響を受けた理由が納得できた。

参考文献

1）Doris Mundus 編　Carl Reinecke Erlebnisse und Bekenntnisse Lehmstedt 2005
2）Arnfred Elder　　Robert Schumann und seine zeit Laaber 2002
3）ホイベルガー，リヒャルト・フェリンガー著　天崎浩二　編訳　関根祐子　共訳『ブラームスは語る』ブラームス回想録②　音楽之友社　2004
4）ニューグローブ世界音楽大事典19　講談社　1995
5）新訂標準音楽事典　音楽之友社　1991
6）最新名曲解説全集　第13巻　室内楽曲Ⅲ　音楽之友社　1981
7）Die Musik in Geschichte und Gegenward 11 Baerenreiter 1989

引用楽譜

1）Concert H moll fuer Pianoforte mit Orchester Op.254　Carl Reinecke
Jul. Heinr. Zimmermann 1901（Pianoforte Solostimme）
2）Concert H moll fuer Pianoforte mit Orchester Op.254 Carl Reinecke
Whilhelm Zimmermann 1901（Orchesterstimmen）

A Study of the Carl Reinecke's Piano Concerto Nr. 4 in B Minor, Op.254

Yuriko MURASAWA

Carl Reinecke composed four piano concertos. It is impossible to obtain these scores in Japan, because the opportunity to perform them is rare worldwide.

In December 2005, I was invited and performed the fourth piano concerto in Weisser Saal–Neues Schloss Stuttgart, Germany.

Based on this work, I examined and considered to the fourth piano concerto, character of Carl Reineche, and his connection with other musicians, by the rental score and his autobiography obtained from Germany.